

抑制から生まれる美しさ

黒崎 博 尾野 真千子 堀川 とんこう

テレビドラマ番組優秀賞受賞作品『広島発ドラマ 火の魚』(NHK 広島放送局)は、瀬戸内海の小さな島で暮らす老作家と東京の出版社から原稿を取りに来る女性編集者の、“命”を巡る儂い恋の物語。

テレビドラマ番組審査委員の堀川とんこうさんが、この作品で演出賞を受賞したディレクターの黒崎博さんと演技賞を受賞した女優・尾野真千子さんに話を聞いた。



『火の魚』より——病院の中庭で見舞に来た老作家(原田芳雄)から花束を受け取った編集者・折見(尾野真千子)

堀川 この作品を見て、僕は改めてテレビドラマの楽しさとは何かを考えさせられました。目が細かく刻んである物差しを当てれば、人間の心の微細な動きとか陰影のようなものが見えてくるんですね。量産されるドラマは、みな視聴者を喜ばそうと懸命です。でも残念なことに、奇想天外な展開やあざとい話を期待されているという思い込みが、どんどん物差しの目を粗くしていき、更に視聴者の見る目をも下げてしまう。難しいことですが、よい視聴者を育てるのもまたドラマです。寂しい再生産が繰り返されてい

る状況の中で、この作品の登場に、皆ハッと驚いたと思います。

黒崎 堀川さんにそう仰っていただいて光栄です。

ドラマ化に辿り着くまでの8年間

堀川 「火の魚」は室生犀星の地味な作品ですが、どうしてこれをドラマ化しようと思ったのですか？

黒崎 8年程前ですが、無駄なものを全て削ぎ落とし短編小説のようなドラマを作りたいと思ったんです。その頃本屋で手に取った「火の魚」の、魚拓をとるというエピソードが強く心に残

りました。魚を殺して命を永遠に刻み付けるという独特の行為に惹かれたんです。それ以来、色々な形のプロットを提案し続けていました。

堀川 かなり時間が掛かりましたね。

黒崎 何せ地味ですし、なかなか現実的な話になりませんでした。広島局に異動して、「帽子」というドラマを作った後に、どうしてももう一本作りたいという僕の希望が叶ったんです。

堀川 「帽子」もとてもいい作品でした。その成功が後押ししたのでしょうか。

黒崎 「帽子」を作ったことで、地方局で地元を舞台にしたドラマを作って地元の視聴者に届けること、更に全国放送することのインパクトを感じることができました。そして何より、広島局というのは、核や平和に関する番組制作が多いですし、他の放送局では考えられないくらい、皆が“命”について迷いなく真剣に考えている所なんです。だから僕が「帽子」に続いて再度“命”をテーマにした作品を作りたいと言った時に、受け入れてもらえたんですね。

堀川 努力が実って、原田芳雄さん演ずる老作家と、尾野さん演ずる編集者（折見）という二人の登場人物の人間像がはっきり出来たのはどの段階なんですか。

黒崎 最終的には渡辺あやさんの脚本が出来上がった時です。折見の口調が原作の古めかしい言葉遣いにかなり近い形だったのが僕には驚きでした。こんな言葉遣いの女性はもういないし、演じるのも難しいし、どうなるのか予想もつかず、かなり話し合いを重ねました。

堀川 怖かったですでしょう。でも、折見の台詞に少し前の時代の日本語がきっちり出てくるのは、聞いていて快感でしたよ。

黒崎 折見の口調は非常に簡潔で、一番肝心な時に沈黙してしまうんです。大事なことを伝えたい時に、言葉にならずに黙ってしまう——そういうリアリティを渡辺さんは直感的に表現されたんだと思います。

堀川 そこは大成功ですね。偏屈な老作家に負けない意志の強いキャラクターを作り出しているのは、彼女の言葉遣いと寡黙さです。作家が描く「金魚娘」を折見が毅然として「あれがあなたの墮落の象徴です」とけなす、あの二人の対立関係が、

この恋物語を支えている。8年間の努力が見事に成果をあげていますね。

折見とち子になるということ

堀川 尾野さんは演じられて、いかがでしたか。

尾野 全てが難しかったです。初めは言葉遣いに操られてしまって、折見とち子というキャラクターが自分の中に浸透していかないんです。彼女を自分のものにするまでに時間が掛かりました。

黒崎 尾野さんと仕事をするのは初めてですが、10年程前に一度オーディションで彼女と会ったことがあって、その時に、いつかこの人と仕事をするんだろなあという予感がありました。それで、かなり前の段階からこの役は尾野さんだと僕の中で決めていたんです。打ち合わせでお会いして、この人は、どんなに高いハードルに対しても、それを乗り越えるために脇目もふらずに努力して来る人だなと感じましたし、実際その通りでした。

堀川 金魚の魚拓をとるシーンで、金魚に針を刺す折見の顔は、迫力ありましたよ。

尾野 予め鯛で魚拓の練習をしましたが、鯛はこの後に食べるんだと思うと平気でした。でもいざペットである金魚に向かおうとすると、もうダメなんです。私はこれを殺すんだと想像するだけで苦しくなってしまうって…本当に怖かったです。

黒崎 僕はびっくりしました。彼女の気持ちがあれ程震え、壊れていくとは全く想像していなかつ



書斎で老作家と対峙する折見。「先生の作品はすべて拝読しております」

たんです。2回撮りましたが、最初に起こった感情は再現性のないもので、編集の時に、このテイクワンをどう使うかで作品が決まるんだという緊張感がありました。

堀川 見ていてゾクゾクしました。



黒崎 博さん
(くろさき・ひろし)

1969年生まれ。92年NHKに入局し、教育番組を担当。96年にドラマ番組部に転ずる。主な演出作品に、朝の連続ドラマ「わかば」「どんと晴れ」、土曜ドラマ「マチベン」「ウォーカーズ」等があり、2008年に広島放送局で制作した特集ドラマ「帽子」は、芸術祭優秀賞、放送文化基金賞優秀賞を受賞。



尾野 真千子さん
(おの・まちこ)

1981年生まれ。97年に映画「萌の朱雀」でデビュー。その後主演した「殯の森」はカンヌ国際映画祭でグランプリを獲得。2010年はテレビドラマ「mother」などの出演や主演映画「真幸くあらば」「トロッコ」が公開するなど幅広く活躍中。今後公開予定の主演映画に、「心中天使」がある。

説明しないことで生まれるミステリー

堀川 その直後、食堂で、折見が鯛の刺身をパクパク食べるでしょう。台詞もない短いシーンですが、あれは気になる場面でした。

尾野 あそこを撮っていた時、監督から、「食べてる間、何考えてるの？」って何度も聞かれたんですよ。

黒崎 そうだった？

尾野 そうでした！

黒崎 あのシーンはこの物語の肝だったので、そこには当然色んな意味を込められる。でも、「このシーンはこう解釈をして臨むんだよ」と、方向を一つに定めると、そこで終わってしまうと思ったんです。島での合宿中、彼女が魚をきれいに食べるのを見て、そうだ、きちんと食べるということがあればいいんだと考えました。でも、やっぱり気になって、彼女が違う解釈をしていないかを確認したんですね。それで、ただ鯛と向き合って食べるつもりらしい、大丈夫だと安心したわけです。

堀川 作家の方は、「お前、金魚を殺しておいてよく食うよな」と、苦々しい顔をして彼女を見ているよね。

黒崎 あそこで作家が彼女に完敗したんです。70歳まで書き続け、「俺は人より人生を知り尽くしている」と思い込んでいる彼に対して、東京からふらっと現れた若い女性編集者が、凶らずも“命の秘密”を教える。彼女は、ふとした所に顔を出すその“秘密”に触れたことがある人で、そのことが、鯛を淡々と食べる姿に映し出されるんじゃないかと思っていました。

堀川 僕は、生き物を食ってその命をもらって生きるぞという彼女の意志みたいなものを感じたなあ。

でも、何も説明しないで役者に投げ出すっていうのも、ずいぶん大胆で勇気がありますね。それが功を奏して、あの場面は若干のミステリーを含んだ、“ドラマの最後の艶”になっていました。一般に多くのドラマは説明過多になってしまう。でも人は、心の中で、言えないことも考えているわけです。

原田芳雄さんとの真剣勝負

堀川 原田さんもいい演技をされていましたね。

黒崎 原田さんは、毎朝、ものすごく緊張して現場に入って来られて、「今日のおそこ、どうするんだ」と一つ一つ確認されるんです。撮影の途中でも何度も呼ばれて話し合いました。出来合いの演技というのは一切なく、ゼロから一緒に考えて悩んで下さって、毎日が真剣勝負でした。

尾野 原田さんと向き合うことも私にとってはとても高いハードルでした。でも、原田さんがたくさん考えて下さったから、私は安心して感じるままの表現をぶつけられたのだと思います。

堀川 折見に「私が金魚の魚拓をとれば、先生は少しは気がおすみになりますか」と言われて、作家が声を荒げて「そうだね」と返すでしょう。あそこを乗り切るために、原田さんが演技的なジャンプをしている感じがよく分かりました。自分のペットの魚拓をとれという実に横暴な注文を出して、恋する女にサディスティックになっている。その本当の自分を隠しているんだよね。

黒崎 原田さんが醸し出される「味わい」は本当に素晴らしいと思います。

堀川 突っ張り通すキャラクターが滑稽でもあって面白いシーンでしたね。

涙を呑んでをカットした幻のシーン

尾野 原田さんのあの台詞の後、私、泣いてしまったんです。編集では切られていますけど、あの続きで魚拓に必要なものを用意するシーンがあって、演技しながらつらくなってきてしまっ…。

黒崎 僕もそのテンションの高さに、カットと声を掛ける気力もなくなるくらい凄い芝居でした。当然、いいシーンだと思ったし、最初の編集には残っていました。でも、流れで見ていくと、彼女の溢れる思いが伝わり過ぎてしまうんです。その後も、完成した魚拓を引き寄せて見る作家を彼女が凝視しているんですが、そのカットを後一秒延ばしたら、彼女の思いが物語の中で膨らみ過ぎてしまう。編集しながら「もう10フレ、あと10フレ」と、泣く泣く切っていました。

堀川 それはほとんど老練の監督が達する領域ですね。今回の審査でこの作品が評価された理由の一つが、“抑制が効いている”ということでした。よくあることですが、“いい顔してる”とか、“泣ける”からと、やたら長く繋いだりすると、自制心のある大人の話にはならない。そういう意味でとても潔い決断をされていますね。

演技する自己、演出する自己

堀川 最後に、演技も演出も一般に“自己表現”って言いますよね。尾野さんは今回の作品で自己表現をされていますか。

尾野 私は演じる時に、他人になるつもりが、結局自分になっているんです。何をやるにしても、自分がこれまで経験したり感じて来たことの中から何か共通点を探し出して、それをなんとか膨らまそうとしていますね。だから最終的には自分が露出していると思います。今回、今まで私の出ている作品に何の反応もなかった姉が初めて、「自分の妹が癌になったみたいだった」と感想を言ってくれて、とても嬉しかったんです。

黒崎 尾野真千子という人は、珍しいくらい自分の身を切りながら演ずる人です。さぞかし疲れるだろうと思いますが。

堀川 小手先の演技が横行する中で、出来る限り演じない、余計なことはしないで人物の存在に迫るという方向で努力する俳優さんは少数ですが、それが本物なのだと思います。尾野さんの演技は、



堀川 とんこうさん
(ほりかわ・とんこう)

1937年生。61年に東京放送入社、テレビ制作局に入局以来数々のドラマを演出。77年「岸辺のアルバム」でプロデューサーに。「聖母モモコの受難」「恋人たちのいた場所〜袋の男」「或る『小倉日記』伝」「父系の指」「東京卒業」など、鋭い視点で時代を切り取った作品で受賞も多数。97年退社後、テレビ番組制作会社・カズモ専務を経てフリー。2001年東映創立50周年記念映画「千年の恋源氏物語」を監督。著書「ずっとドラマを作ってきた」（新潮社）ほか。

意識的に抑制しているのでなく、演じている感じが全くしないというのが凄い。

尾野 でも、そういうことって今のドラマの現場ではあまり必要とされていないことが多いんです。現場に行くと、「こうして下さい」って言われるままにやらされてしまう。自分の気持ちが高まってくるのを待ってくれる監督は少ないんです。そういう意味でも今回は、本当に恵まれた環境でした。

堀川 黒崎さんにとって、演出は自己表現ですか。

黒崎 そうですね。100%自分でなきゃいけない、そういうものをやりたいという気持ちがある一方で、それを冷静に疑って見る目を持つのがプロだと思います。自意識の落とし穴に嵌らないよう、俳優さんやスタッフに、一緒に考え、見つめていて欲しいです。

堀川 僕は若い時に、演出家にとって自己表現というのは“自己隠し”だと思ったことがあります。くだらない自分、とるに足らない自分を何とか世間から隠すために、素敵な人物が出てくるドラマを作っている。

黒崎 なるほど。奥深いですね。経験を重ねるほどに、正解が分らなくなっていく。つくづく難しいなあと感じます。

堀川 今日はお二人とお話し出来て楽しかったです。



黒崎
尾野 有難うございました。

贈呈式にて